

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370580

研究課題名(和文) 非英語母語話者とのコミュニケーションにおける日本人英語音声の中心特性

研究課題名(英文) Phonetic Core Features of Japanese influenced English in Lingua Franca
Communitisation

研究代表者

都築 雅子 (Tsuzuki, Masako)

中京大学・国際教養学部・教授

研究者番号：00227448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：英語母語話者および韓国語母語話者による聞き取り実験の結果を分析・考察することにより、日本人の話す英語音声特性のうち、(1)語頭の破裂音・摩擦音・破擦音の弱さおよび誤発音、(2)曖昧母音の誤発音、(3)複合語の強勢アクセントの欠如、(4)トーン・ユニットの区切り方の間違い、が通じなさを招く主要な要因であることがわかった。日本語の影響から、日本人は英語の子音を弱く発音する傾向にある一方、曖昧母音の発音は弱化しない傾向にあり、それらがインテリジャビリティを損なっている。これらの結果は、英語の発音学習・教育における優先課題の選定などに、示唆的である。

研究成果の概要(英文)：Through analyses of the transcription of Japanese EFL speakers' speech by English naive speakers and Korean native speakers, we have identified those features that would impede intelligibility: (1) mispronunciation and/or weakening of word-initial plosives, fricatives & affricates; (2) mispronunciation of schwa vowels; (3) absence of compound stress; and (4) improper segmentation of words, phrases and sentences. These findings will contribute effective learning and teaching, especially the prioritization of phonological instructions.

研究分野：英語学

キーワード：インテリジャビリティ 日本人英語 リンガフランカ 英語母語話者 韓国語母語話者 子音 曖昧母音

1. 研究開始当初の背景

英語は、母語話者・非母語話者に関わらず、世界の人々がコミュニケーションを図る手段—リンガフランカ (Lingua franca) となっている。

このような状況下、世界ではシンガポール英語など、それぞれの母語の影響を受けた様々な英語変種 (World Englishes) が存在し、そのような英語変種を容認する一方で、意思疎通のために最低限必要な英語音声の中心特性 (core features) を確立しようとする試みがなされてきている。中心特性の同定は、英語発音教育・学習において優先的に改善すべき特性とそうでない特性の峻別に繋がる点で、大きな意義がある。

今まで、日本人英語音声に特化した中心特性の研究としては、Tsuzuki et al. (2013), Nishio & Tsuzuki (2014) などがある。日本人理系研究者による学会発表という状況を設定し、英語母語話者対象に日本人英語音声の聞き取り実験を行い、転記したものを分析した結果、インテリジャビリティの阻害要因となる日本人英語音声の中心特性として、(1) l・r の誤発音 (2) 摩擦音・破擦音の発音の弱さ・誤発音 (3) 氣息音がないなど、破裂音の発音の弱さ・誤発音 (4) 母音の長さの間違え、(5) 強勢の非実現や間違え (6) 不適切なトーン・ユニットの切り方などが挙げられることがわかった。また日本人英語に慣れていない英語母語話者にとっては、上記に加え、曖昧母音 schwa の誤発音もインテリジャビリティの阻害要因になっていることがわかった。

2. 研究の目的

本研究は「アジアのリンガフランカとして、日本語母語話者の英語音声面における中心特性 (コミュニケーションの阻害要因に関わる特性) の確立」を目的とした。

今までに Tsuzuki et al. (2013), Nishio & Tsuzuki (2014) など、一連の研究により、英語母語話者を対象に日本人英語の聞き取り実験を行い、日本語に影響を受けた英語音声においてインテリジャビリティに関わる中心特性を特定してきた。

しかしながら、世界では第二言語 (学校、家庭以外の社会一般で使用する言語)、あるいは外国語として英語を使用する人の人数は英語母語話者の人数を遥かに上回っており、日本人においても、研究やビジネスの現場で英語を話す相手は、非英語母語話者である場合の方がむしろ多いのが現状である。

以上を鑑みて、(1) 聞き取り実験の対象を韓国語母語話者、中国語母語話者など非英語母語話者に広げることにより、非英語母語話者

とのコミュニケーションにおける中心特性を特定すること、(2) 非英語母語話者を対象とした実験結果と英語母語話者を対象とした実験結果を比較・分析し、共通点に着目し、一般化・精緻化を行うことにより、より一般性の高い日本人英語音声のリンガフランカ中心特性を特定すること、が本研究の目的である。

3. 研究の方法

Tsuzuki et al. (2013), Nishio & Tsuzuki (2014) などの研究を出発点として、実験方法を精査した上で、聞き取り実験の対象者を非英語母語話者に広げることにより、母語話者・非英語母語話者間および非英語母語話者間の英語によるコミュニケーションの阻害要因となる日本人英語音声特性の解明を試みた。

まずパイロットスタディとして日本にいる韓国語母語話者 3 名を対象に、聞き取り実験を行った。日本語学習歴を含めたアンケートを行ったうえで、聞き取り実感による転記および理解度評定を行い、その結果を分析・考察し、English as Lingua Franca 第 6 回国際大会 (アテネ・アメリカ大学にて、2014 年 9 月) で発表した。

さらに、パイロットスタディの結果を踏まえて、分担者の奉鉉京氏が韓国に出張し、韓国語母語話者 14 名を対象に、日本人英語音声の聞き取り実験を行った。英語力のなさによる影響を取り除くために、十分に英語力のある者 (TOEIC900 点以上あるいは TOEFLiBT95 以上) を被検者とした。さらに日本人英語の慣れによる影響を取り除くため、日本人との英語によるコミュニケーションの経験がほとんどない者を被検者とした。これらの結果を分析・考察し、The 21st Conference of the International Association for World Englishes で発表した。

韓国語母語話者を対象とした二つの聞き取り実験の結果を分析・考察し、韓国語母語話者にとり、日本人との英語によるコミュニケーションにおいて、インテリジャビリティを下げる阻害要因となる日本人英語音声特性を特定した。

以上の実験結果を、英語母語話者を対象とした聞き取り実験の結果と比較・考察し、共通点を抽出し、日本人英語音声特性のインテリジャビリティの阻害要因となる中心特性の一般化・精緻化をはかった。

当初は、聞き取り実験の対象をさらに中国語母語話者に広げる予定だったが、研究代表者・分担者などの時間の都合上、行うことができなかった。

4. 研究成果

[1]パイロットスタディとして日本にいる韓国語母語話者3名を対象に聞き取り実験を行い、その転記結果を分析・考察した。

その結果、(1)語末を除く破裂音・摩擦音・破擦音の誤発音および弱さ (2)母音の長さの間違い (3)曖昧母音 *schwa* の誤発音 (4)不適切なトーン・ユニットがコミュニケーションの阻害要因となっていることがわかった。これらの結果は、英語母語話者にとっての阻害要因と同じである。

一方、英語母語話者には阻害要因になるものの、韓国語母語話者にとってはそれほど阻害要因にならないものとして、(1)流音の誤発音 (2)語末の破裂音・摩擦音・破擦音の誤発音・弱さ (3)強勢アクセントの非実現などが挙げられる。これらの音声特性は、韓国語にもみられることから、英語には重要な特性であっても、母語に欠けている場合は、その特性が英語に実現されていなくても、それほどインテリジャビリティに影響がないということになる。

これらの分析結果を、English as Lingua Franca 第6回国際大会(アテネ・アメリカ大学にて、2014年9月)で発表した。

[2]韓国在住の韓国語母語話者14名を対象に、日本人英語音声の聞き取り実験を行った。英語力のなさによる影響を取り除くために、十分に英語力のある (TOEIC900点以上あるいはTOEFLiBT95以上) の被検者とした。さらに日本人英語の慣れによる影響を取り除くため、日本人との英語によるコミュニケーションの経験がほとんどない者を被検者とした。

実験の結果、「韓国語母語話者にとって、日本人理系研究者・大学院生の英語音声のインテリジャビリティは低く、発話内容が理解できていない」ということがわかった。さらにインテリジャビリティの阻害要因として(1)語頭の破裂音・摩擦音・破擦音の誤発音および弱さ (2)曖昧母音 *schwa* の誤発音 (3)複合語の強勢アクセントの欠如 (4)不適切なトーン・ユニット (5)場合によっては流音の誤発音および母音の長さの間違い、が挙げられることがわかった。一方、(1)語頭以外の摩擦音・破擦音の弱さ (2)強勢アクセントの非実現は、それほどインテリジャビリティを下げないことがわかった。インテリジャビリティ下げない、これらの特性は、韓国語と日本語共通にみられる音声特性でもあることから、韓国語母語話者にとっても母語の影響から実現しにくい英語音声特性は、韓国語母語話者が英語を聞き取る際にそれ程、阻害要因にはならないということが言える。

これらの結果を分析・考察し、The 21st

Conference of the International Association for World Englishes で発表した。

[3]以上の韓国語母語話者による聞き取り実験結果を、英語母語話者を対象とした聞き取り実験の結果と比較・考察した。その結果、(1)語頭の破裂音・摩擦音・破擦音の弱さおよび誤発音 (2)曖昧母音 [ə] の誤発音 (3)複合語の強勢アクセントの欠如 (4)不適切なトーン・ユニットが、日本人英語音声の特性の中で最もインテリジャビリティを下げる要因であることがわかった。

以上の研究結果は、今後の英語の発音学習・教育に有益な含意を有している。日本語の影響から、日本人は英語の子音を弱く、短く発音する傾向にある一方、曖昧母音 [ə] の発音は弱化しない傾向にある。それらの傾向が通じなさの主要要因になっているということが明らかになったのである。日本語と違い、強勢アクセント言語である英語は、強弱のメリハリが非常に重要であり、特に子音の発音するときの呼気の強さ・長さ、曖昧母音の弱化の2点を特に気を付ける必要があるということになる。英語の発音学習・教育の際は、その点を意識して学習・教育する必要がある、今後の英語発音学習・教育に非常に示唆のある結果であると言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計15件)

- ① 都築雅子 (2018) 「絵本 'The Giving Tree' の英語オリジナル版と日本語翻訳版の一考察」『ことばのパーспекティヴ』中村芳久教授退職記念論文集刊行会編, p. 147-159. 査読無
- ② Bong, HyunKyung & Tsuzuki, Masako (2017) 'A Study on Adverbs: *Really* and *Actually*' *The 2017 International Conference Proceedings of English Teachers Association in Korea (ETAK)*: pp 145-153. 査読有
- ③ 都築雅子 (2017) 「依頼表現・呼称表現にみられるポライトネス - 映画「プラダを着た悪魔」と「英国王のスピーチ」より」『不思議に満ちた言語の世界(上)』高見他編, 135-139 ひつじ書房. 査読有
- ④ Bong, HyunKyung (2017) 'Lemmatic Properties of Adverbial Particles', *The 22nd PAAL Conference Proceedings*, pp36-37. 査読有
- ⑤ 都築雅子 (2016) 「in fact, actually, indeed, really の考察」『英語語法文法

- 研究』第23号, pp.36-52. 英語語法文法学会. 査読無
- ⑥ 奉鉉京(2016) “Roles of Causal Factors and L1 in the SLA of English Prepositions” *International Conference Proceedings of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics* (pp30-31 & K3:1-2) 査読無
- ⑦ 奉鉉京(2016) “English Education: Developing Intercultural Communicative Competence,” *The 2016 ETAK & KICE Joint International Conference Proceedings on English Education in the Multicultural Era*, pp. 61~68. 査読無
- ⑧ 奉鉉京(2016) “Differential Difficulty: Second Language Acquisition of English Prepositions,” *Journal of Humanities and Social Sciences Shinshu University* 10, pp. 52-67. 査読有
- ⑨ 宮武香織・山添直樹・都築雅子(2015) 「英語教員を対象とした発音ワークショップに関する報告と考察」『文化科学研究』26号, pp43-54. 査読無
- ⑩ 都築雅子(2015) 「コーパスと語彙意味論研究 — 加熱調理動詞の使役交替性」『コーパスと英文法・語法』英語コーパス研究シリーズ4 (深谷・滝沢編) pp. 141-168 ひつじ書房 査読有
- ⑪ 奉鉉京(2015) “Language Change in Language Acquisition and Interlanguage in Second Language Acquisition: Examining Studies on the English Preposition for” *Journal of Humanities and Social Science Shinshu University* 第9号 pp. 73-88 査読有
- ⑫ 西尾由里・上斗晶代・三宅美鈴.(2015) 「小学校英語教育のための音声共通参照枠の提案—音声教育に関するアンケートと小学校英語教科書の音声分析に基づいて—」, *The JACET 54th International Convention Book*, pp. 114-115. 査読有
- ⑬ 上斗晶代・西尾由里・三宅美鈴.(2015) 「英語学習入門期における発達到達度指標の提案—日本人のための「英語音声共通参照枠」構築にむけて—」『第15回小学校英語教育学会 (JES) 広島大会発表要項』, p. 66. 査読無
- ⑭ Nishio Yuri & Masako Tsuzuki(2014) “Phonological Features of Japanese EFL Speakers from the Perspective of Intelligibility.” *JACET JOURNAL No. 58*, pp. 57-78. 査読有
- ⑮ 西尾由里 (2014) 「小学生の音声指導と実践」『愛知教育大学から発信するグローバル時代の英語教育』愛知教育大学外国語教育講座編, pp.25-32. 鳴海出版. 査読無
- [学会発表] (計10件)
- ① Bong, Hyunkyung & Tsuzuki, Masako (2017) A Study on Adverbs: *Really* and *Actually*. *2018 English Teachers Association in Korea (ETAK) Annual Conference*.
- ② Bong, HyunKyung & Chung, Bohyon (2017) The Attitudes of Japanese and Korean EFL Learners toward Four Native Varieties of English. *The 22nd Conference of the International Association for World Englishes (IAWE)*
- ③ Chung, Bohyon & Bong, HyunKyung (2017) Perception and Judgement on English Accent by Korean Learners of English. *The 22nd Conference of the International Association for World Englishes (IAWE)*
- ④ Chung, Bohyon & Bong, HyunKyung (2017) A Study on Perception of Korean-Accented English. *GlobELT 2017 Conference: An International Conference on Teaching and Learning English as an Additional Language*.
- ⑤ Tsuzuki Masako (2016) Use of *Actually* as a Discourse Marker. *The 9th International Conference of English as a Lingua Franca*, Universitat de Lleida.
- ⑥ Tsuzuki Masako & Bong, HyunKyung (2015) Intelligibility of Japanese Accented English for Korean Native Speakers. *The 21st Conference of the International Association for World Englishes*, Bogazici University, Istanbul.
- ⑦ 西尾由里・上斗晶代・三宅美鈴.(2015) 「小学校英語教育のための音声共通参照枠の提案—音声教育に関するアンケートと小学校英語教科書の音声分析に基づいて—」 *The JACET 54th International Convention*, 21.
- ⑧ 上斗晶代・西尾由里・三宅美鈴.(2015) 「英

語学習入門期における発達到達度指標の提案—日本人のための「英語音声共通参照枠」構築にむけて—, 第15回小学校英語教育学会(JES)広島大会, 広島大学.

- ⑨ Tsuzuki Masako & Bong, HyunKyung (2014) “Preliminary Studies of Intelligibility Assessment of Japanese Accents by Korean Native Speakers of English.” *The 7th International Conference of English as a Lingua Franca*, The America college of Greece, Athens.

- ⑩ 都築雅子(2014)「言語理論の学問知を生かした英語教育シンポジウム」 *The JACET 23rd International Convention*. 広島市立大学.

〔図書〕(計1件)

- ① 鈴木達也・都築雅子・山添直樹他4名 (2015)高等学校検定教科書『英語表現Ⅱ』(株)フォーイン スクリーンプレイ事業部 全144頁.

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

都築 雅子 (TSUZUKI, Masako)
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号: 00227448

(2) 研究分担者

西尾 由里 (NISHIO, Yuri)
名城大学・外国語学部・教授
研究者番号: 20455059

(3) 研究分担者

奉 鉉京 (BONG, HyunKyung)
信州大学・全学教育機構・准教授
研究者番号: 50434593

(4) 研究分担者

山添 直樹 (YAMAZOE, Naoki)
名城大学・大学教育開発センター・講師
研究者番号: 00555641